

生産性の戦略的補完の問題と銀行の貸し出し行動

一橋大学 保原伸弘

Diamond(1984)は、家計などの多数の小規模な資産所有者から零細な資金を集めて、企業などの大口の資金需要を満足させるといった、いわば資金調達における銀行の働きの重要性に注目した。しかし、銀行も利潤追求団体として存続していくには、預金者から集めた資金を銀行内にただ寝かせておくだけではだめで、企業等の資金需要者に資金を積極的に貸し出し、貸し出した元本に利子を上乘せしめたものを資金需要者から回収し、自らは預金者に支払う利子と資金重要者から徴収する利子との間の利ざやをできるだけ稼ぎ出すようにしなくてはならない。これに伴い、預金者から集めた資金をどの資金需要者に提供するかという、いわば資金の供給先の選択も銀行にとって重要になってくる。ここで銀行にとっての資金の貸し出し先は単一の企業である場合のみならず複数の企業に及ぶ場合もあるであろう。その場合には、複数の企業間で資金の供給先をどのように組み合わせるかといった問題も重要になるのではないか。たとえば、ある企業と他の企業のそれぞれが抱える生産プロジェクトが同時にある一定規模まで行われれば、それぞれの投資の効果も大きなものになるという情報を銀行が独占的に持っているとする。このとき銀行は、情報の非対称性により、それぞれの企業に対し投資プロジェクトの効果が発揮されるだけの資金を提供することによって、生産性の上昇に応じた高い利子を徴収し、利ざやを稼ぐことが可能になる。また、銀行から資金を提供された企業も双方の補完性の実現による高い生産性に遭遇し、さらに経済全体も高い生産を享受することになる。

本稿は資金を必要とする企業家と資金を供給する資産家との間の資金の需給関係を分析した Hart and Moore(1994)に生産の補完性を持たせ、同枠組みで主張する、企業家の担保価値と投資行動についての議論を再吟味する。その結果、企業間に生産性の潜在的補完性がある場合であっても、いわゆる市場の戦略的補完性が問題になり、資金供給がうまくいかないことを示す。しかし、レントは上昇するため、利潤追求の余地を残し、このレントを追及する経済主体、すなわち、銀行の行動を招き、この行動によって資金運用の厚生は改善する。

しかし、時間の経過を通じては、企業家の資産も一定ではなく、蓄積ないしは増加する可能性がある。これとともに、資金の借り入れ行動も改善し、ゆくゆくは銀行の助けを借りずとも、すなわち市場から直接資金を得ることも可能になろう。本稿の後半では、もともと2期間モデルである Hart and Moore(1994)を多期間モデルに拡張し、その資産蓄積による借り入れが改善する状況も示す。まさに、銀行の持続的な貸し出し行動それ自体がレントを減少させる状況も描くのである。